
一人の鴉

無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人の鴉

【Nコード】

N2410W

【作者名】

無

【あらすじ】

特攻兵器の襲来後——世界は崩壊した。混乱したなか、ひたすら生きていた者たちの中に、一人のMT乗りがいた。ACLRの小説です、駄文ですが宜しくお願いします。

ブローグ

レイヴン――

最強の人型兵器、アーマードコアを操り――

報酬と引き換えに、依頼を遂行する傭兵――

なにもにも縛られない例外的な存在である――

半年前――

突如現れた特攻兵器により、地上のあらゆる場所が焼き付くされた――

レイヴン達もまた、この特攻兵器になすすべもなく、抵抗も虚しく大きく数を減らす。

三大企業のクレスト、ミラージュ、キサラギも壊滅的被害を受け、
世界は崩壊した―

そうしたなか、あらゆる武装勢力が突如名乗りを上げはじめる―

瞬く間にそれは数を増やし、やがて物質の取り合いになり、戦争が
おきはじめる―

これを危惧した三大企業は、同盟を組み、合併、アライアンスを設
立する―

半年間、復興と自らの戦力を拡大、次々と武装勢力を吸収していく―

だが、ここでまた新たな組織が立ち上がる―

バーテックス―

レイヴンによるレイヴンでの秩序の統一を目的としており、アライ
アンスに宣戦布告を行う―

両者の争いは激化し、衝突はもはやまぬがれなくなった―

バーテックスの予告したアライアンス襲撃まで、あと24時間――

MT乗り（前書き）

意外にあっさりと出来てしまった。

自分でも驚きだ・・・

MT乗り

砂漠の中を八機のMTと、一つの輸送車が走っていく。

MTの種類はミサイルを付けたオストリッチが四機、逆足のCR77ミサイル付きが三機、そして隊長格のCR85Mが一機である。

砂漠の中を移動中の自分は暑さにまいていた。

「あちいゝ何でこんな暑いなかをいかなきゃなんないんだよ……」

「

そんな愚痴をこぼしているとオストリッチにのっている仲間が通信でいってくる。

『我慢しろ、目的地まであと少しだ、ミラージュにこの荷を届けたら金がある、そしたら一杯やろうぜ。』

「いまは酒じゃなくて水がほしいぜまったく。」

『今の時代じゃ酒より水のほうが貴重だつての、2ヶ月前の特攻兵器のせいで、あちこちの湖が渴れ果てるわ、地下水汲み上げの浄水場は瓦礫の山、企業どもが総力上げて水場を探すはめになったからな。』

「笑えねえなあ、そんだけ酷い時代になっちまったか。」

『気をつけないとな、今は弱肉強食の世界、下手したらおれらもやられるぞ。』

「少なくとも今は大丈夫だろう、弱いとは言えMTが八機、しかもミラージュの方から頼りになる強力なMTもつけてもらってた、レイヴンでも来なきゃやられやしねえよ、頼りにしてるぜ？隊長さんよ。」

そう言うのと、しっかりとした中年の男の声が帰ってくる。

『まかせてもらおう、しかし警戒するに越したことわない。君たちの運んでる積み荷はACパーツであり、ミラージュにとっては貴重な物だ、奪われるわけにはいかん。』

「あいからわず堅いねえ……ま、せいぜい気を付けるとしやしよう。」

しばらく進むと前方に溪谷が見えてくる、ここを通れば目的地はす

ぐだ。

ようやく着いたか、そう思い気を緩めた瞬間――

バガシャアアアン！
バガシャアアアン！

いきなり先行していたオストリッチ二機が爆発する。

『？！――敵襲？！何処から――』

『隊長！あそこです！溪谷の上にあります！』

言われた方向を見ると、茶色いMTが一機、岩と同化するようなかたちでいる。

色は違うが外見はCR85Mだ。

そのMTは一気にブースターを吹かし、こちらに突撃してくる。

皆が動揺するなか隊長が素早く指示をだす。

『落ち着け！ミサイルで迎撃しろ！輸送車は後ろに下がれ！』

素早く指示にしたがい隊長機をのぞく5機が一斉にミサイルを放つ。

相手のMTはそれを左に避けようとする、当然ミサイルも左に行く。

しかし――

急にそのMTは右に切り替えミサイルをほとんど避ける。

『「なっ?!」!』

なんだありゃあ、いくらなんでもMTでミサイルを避けるなんてそんな簡単にできるはずがねえ！しかも一発しか食らってねえだど?!

驚いてる間に奴はオストリッチ二機に一発ずつバズーカを撃ち込み撃破してしまう。

『くっ、応戦しろ！』

直ぐにレーザーとマシンガン音がなりまくり、奴にとんでいく、数発当たるが相手は気にせずバズー力を四発撃ちCR77Mを二機破壊する。

『ひひひひひっ！』

一機は恐怖に耐えきれなくなったのか後ろをむいて逃げようとする。

奴はそれに一気近づき至近距離から一発撃ち込む。

『た、助けっ・・・！』

バガシャアアアン！

通信虚しく爆発し、とうとう俺と隊長だけになる。

『ばかなっ！キサラギの奴らが強化したBPタイプだど？！あんな機体ミラーージュかクレストの精鋭部隊にしか配備されていないはず

だ！』

奴はそこで一度ブースターを止めこちらの方向を向き、一気に突撃してくる。

『溪谷まで走れっ！時間を稼ぐ！急げっ！』

そう言うといなや隊長は一気に奴に突っ込みパルスライフルを乱射する、相手もバズーカを三連射し、その内の一発があたる。

『ぐっ！』

隊長の動きが止まった瞬間、奴は突撃し、なんと体当たりをかます。

ガチユイツ！

『なあっ？！』

当たった衝撃で二機ともバランスを崩しかけるが奴の方はその状態でバズーカを三連射、そしてそれは全て命中する。

『ぐあああああっ！』

通信の断末魔を最後に隊長のMTは爆発した。

そして奴の銃口がこちらに向き、そして光が放たれた――

終わりかな、これで。

「ゲンジイ、終わりました、回収をお願いします。」

『おうわかった！しかしあいからわずの手際だな、シュカ坊！』

「いい加減その呼び方勘弁してくれませんか？シュカルでいいじゃないですか。」

『カー！ッ！ワシはお前の何倍も生きとるんじゃ！ワシにとつちやあお前なんぞまだまだケツの青いガキじゃ！』

「あー、はいはい分かりましたから早く来てくださいよ。」

そういつて通信を切る、ふと車両を見ると爆風で吹き飛ばされたのか、運転手のぐしゃぐしゃ死体がある。

それを見て少し罪悪感に苛まれるが、自分はその感情を無視した―

元キサラギ特殊部隊員、シュカル・セライドの、今の新しい生活だった。

MT 乗り（後書き）

やはり駄文だ・・・

そして短い・・・

MT図鑑（前書き）

修正しました

MT図鑑

クレストMT

CR—MT77

元祖作業用逆足MT
武装はなし、前線での使用を目的とされたためか、装甲は厚めらしい（ACからすれば結局薄い）

CR—MT77M

元祖に連装ミサイルとレーザーの武装を付けたタイプ、装甲は変わりなし。

ミラージュのオストリッチよりは性能がいい……のか？（微妙）

CR—MT77RO

これまた元祖にアサルトロケットとレーザーを付けたタイプ、装甲はやっぱり変わりなし。

ロケットは意外と痛いので注意が必要、二丁三機固まっているから一機潰せばアポーンアポーン（。□。）ψ

CR—MT83RS

長射程、高反動、高威力と三拍子揃ったスナイパーライフルMT。
しかしその代わり装甲が薄く、近接戦闘に脆い。

索敵用に作られたのか頭に大きなレドームがついている。

ルガ峡谷の依頼でこいつの攻撃を避けようとしてジエネが足りなくなり初期機体で落下することは誰もが一度はやってしまうこと。
（私は一回やらかした。）

CR—MT85M

クレスト御用達、マシンガンとパルスライフルを装備した二脚型MT。
（レーザーではないと思った。）

かなり硬く、厄介な相手、地上での動きも軽快で、撃破するのが少し難しい。
（何回かだけこいつにミサイル避けられた。）

あと武装勢力のみなさんに好評らしい。

CR—MT85B

先ほどの物にバズーカを付けたタイプ、硬さは変わらない。

CR—MT85BP

キサラギの技術を取り入れ大幅にパワーアップしたタイプ。
非常に硬くなっており、とっつきをくれてやりたいほど硬い。
さらにバズーカがバースト（連射）タイプに変わり、厄介この上ない。

なぜかあまり高速で動こうとしないが、こいつら十機集まれば本気でAC一機は落とせると思う。

CR—MT91L2

なんと二門のプラズマキャノンをぶちかましてくる二脚型MT。
改良されており移動が可能になっているが、プラズマキャノンの威力が少々弱まった。

装甲は薄い、砂漠で砂嵐とともにあらわれ後ろからモロにくらうのは誰もが一度はやってしまうこと。

CR—MT98G

二門のグレードキャノンと左腕でナパーム投合銃を装備した強襲と拠点防御のための四脚MT

破壊力があるが熱量も怖い、装甲はそこそこ。

MT追跡でのこいつらの削りは異常である。

CR—MT06SB

拠点防衛を目的として開発された、巨大な二つの前面シールド持ちの二脚MT。

シールドを構えると一切の攻撃を通さない。

バズーカを装備しており盾を開けて撃ってくる。

本体自体の装甲は薄いので後ろに回り込んで攻撃しよう。

CR—MT07LM

試験的に実戦投入された逆足MT。

本体に大型ミサイル二基とマシンガンを装備、大型ミサイルは当たれば脅威、しかし二発しかないのでそれさえ避ければ問題ない。

装甲はかなり薄い。

ミラージュ

MT08—OSTRICH

伝統的な雑魚逆足MT、通称オストリッチ。

武装はライフルのみで威力も弱い、さらに装甲も激薄と弱点しかない。

ただ量産が簡単にできるため、あちこちで改造して利用されている。

MT08H—OSTRICH

ホバーブースターをつけただけ、フワフワ飛んでいる。

武装は変わらずライフルのみ、EN効率の改善で長時間飛行が可能になるも、飛行速度は遅い。
装甲の薄さは変わらないので結局雑魚。

MT08M—OSTRICH

装甲の薄さは変わらないが武装にミサイルを追加し、マシンになったタイプ。
低コストで攻撃力を上げたので、オストリッチの中では一番利用されている。
雑魚にはかわりない。

MT09E—OWL

ミラーージュの主力二脚MT、武装はライフルのみだが強力なECM発生装置を搭載している。
そのせいでとにかくロックがずらい、いやらしい……
装甲はそこそこ

MT09ROE—OWL

武装をロケットに変えたタイプ、ECMは変わらず。
武装を強化したかわりに装甲が薄くなった。

MT10 | BAT

飛行可能の変型MT、武装はミサイル、レーザーキャノン、パルスと意外に豊富。

拠点強襲のためにつくられた、しかし装甲は微妙。

ACで切り捨てると何となく気持ちいいらしい（wiki情報）

MT11 | STALING

三社の共同開発、最新鋭の逆足MT。

強力な二門のレーザーキャノンが痛い、さらにおもいきり跳び跳ねるのでロックしづらい。

装甲も硬いのでかなり苦戦する。

おそらく機体の本体はミラージュが、装甲はクレストが、跳び跳ねるアイデアはキサラギからだろう（変態だしな）。

MT図鑑（後書き）

AC考えないと・・・

フィルダーシティ（前書き）

興>遅かったじゃないか・・・

やっとできた・・・

フィルダーシティ

ロクスタ砂漠―

2ヶ月前の特攻兵器の襲来により、さらにその域を広げ、広大な砂漠となっている。

そこから更に南に少し行ったところに一つの都市がある。

特攻兵器の数がすくなく、あまり被害をうけなかった場所であり、この一月で人が大幅に増えていた。

その都市の名前はフィルダーシティ、小さな地方都市だ。

MTのコックピットが開き、そこからパイロットスーツに身を包んだ男が出てくる。

男はヘルメットを取り、顔を見せる。

少々切り揃えた短めの黒髪に、少し幼い感じをかもしだす顔だちの男。

男はガレージについたカタパルトで地面へと降りていく。

下に降りると声をかけられた。

「シュカ坊！」

「ゲンジイさん、今帰りました。」

声をかけたのは今年で70になるベテランメカニクのゲンジイさん、高齢をおもわせないしっかりとした仕事をしてくれる人だ。

「おう、今日もごくらだったのう。それでな、お前が襲った輸送隊の積み荷、ACパーツだったよ。」

「またACパーツですか？この頃そればかりですね。」

「あと悪いニュースだ、今朝方こんなメールがきやがった。」

ゲンジイはポケットからPADをだし、こちらにみせてくる。

f r o m : アライアンス

『こちらは我々三企業が合併した新組織、アライアンスです。我々は特攻兵器の襲来後、秩序が崩壊したこの世界に法をもたらすために新しく連合統治機構を立ち上げました。つきましては、そちらのフィルダーシティにおいても、私たちアライアンスの考えに同意してくれるものと思います。私達の考えに同意してくれるならば、あらゆる生活物資などをそちらに提供できます、よくお考えになってください、そちらからのご連絡をお待ちしております。』

「とうとう本格的に活動をはじめましたか・・・」

「ああ、今までは同盟だったがこの一ヶ月でもう組織としてまとまったらしい、これからまたみなで集まってアライアンスへの対応を協議するらしい。わしも参加する、お主はどうする？」

「自分はやめておきます、ただでさえ嫌われているに行く必要はないでしょう？」

「まあ構わんがな・・・あとでACパーツの利用方を考えといってくれや。」

「ええ、わかりました、少し仮眠をとってきます。」

そういつて自分はガレージの一角の部屋に入り、ベッドに寝転んだ。

「ゲンジさん！ちょっと来てくれ、上の奴らが呼んでるぜ。」
「ああ、すぐいくわい。」

しかし上の奴らにも困ったもんじゃなあ・・・

「いくらなんでも元キサラギ特殊部隊出身だったってあんなに毛嫌いすることないだろに・・・」

ピピピピッピピピピッ

目覚ましの音になり、自分は起き上がる。

少し昔の夢をみたが、それを忘れるようにする。

あんな事、思い出したところで意味はない。

ベッドの脇においてあった通信端末をいじくり、メールを見ていく。

みるとフィルダー発電所からメールが来ている。

この都市はロクスタ砂漠の南側にあるため、キエラ都市動力炉やザイル発電所から電力を引っ張るよりこっちから引っ張った方が早いのだ。

発電所からはACパーツが高性能のラジエーターだったらこっちにまわしてほしい、と書いてある。

ゲンジイに鹵獲したACパーツがなんだったのか聞いてなかったの
で、部屋をでてガレージの端に行く、何人かの整備員が自分のMT
を修理しており、装甲の張り替えをしている。

その横を通りすぎ、運転席部分が大破した輸送車のところに行く、
クレーンが動いており、ACパーツを別の輸送車に乗せている。

「こんにちは、お疲れ様です。」

「おつ、シユカルさんかい、ちょうどよかった。」

自分は近くにいたゲンジイさんの弟子に話しかける。

「これ、なんのパーツかわかるかい？ゲンジイさんならわかると思
うんだがさつき市長に呼び出されたからなあ。」

二つのくの字がくつついたような形をしているそのパーツをみる。

「キサラギ製ラジエーター、ANANDAだ。」

懐かしいものが手にはいったな、そう思った。

フィルダー発電所に届けるように言ったあと、市街地をぶらつく。

まだあちこちの建物は崩れており、特攻兵器の破壊力を物語っている。

だがそれでも人というのはたくましく、集まった人々はすぐに復興を始め、たった2ヶ月程で人が棲める状況にしたのだ。

「人が自分で破壊したものを自分で直したただけなことか、結局なにもかわりはしないな。」

一人でそう呟く。

……俺はあれを止められなかった、命がおしかったからだ、逃

げた、ひたすらに。

その結果がこれだ、だから自分は……

……考えるのはよそう、頭が痛くなってくる。

自然と右手を強く握りしめ、二度と、同じことを繰り返すまいと自分で再び誓った。

色々な缶詰めを買ってから帰ってくる、今日はコーンスープでも作ろうと思っていると、ゲンジイが声を掛けてくる。

「シュカ坊！すまねえが仕事の依頼だ！すぐ来てくれ！」

「わかりました、いまいきます。」

???

「……フィルダーシティは中立を保つと？」

「はい、報告ではそのようにかかれています。」

「馬鹿なことを……企業どもが中立で納得するはずがあるまい……」

「どうする……仲間……引き入れる？」

「いや、今はまだ動く時期ではない、戦力の集結もまだ終わっていない、今ここで動かしても戦力の差で奴らに負ける。」

「了解した、とりあえずは準備を急ぐとしよう。」

依頼

：fromアライアンス

：toフィルダーシティ

『我々に敵対する武装勢力の排除を依頼したい、そちらの傭兵の腕の方は聞き及んでいる。』

我々の管理下にあるディルガン流通管理局に多数の武装勢力が侵入した、これを殲滅、排除して欲しい。

フィルダーシティとの敵対関係を無くす条件に、そちらから支援をしてほしい、もちろん報酬も支払おう、返事をまつ。』

エレベーターが下がっていくなかで、自分は事のあらましを聞いていた。

「じゃあアライアンスと敵対しないかわりにこの条件が入ってきた

んですか。」

『ああ、市長も馬鹿じゃあない、奴らと中立を保つ代わりにこちらは物資を、あちらさんは戦力を、というかんじであっさり纏まっとな。早すぎる気がするが、あちらさんも消耗が激しいからな。』

「どこも物資不足は変わらないですね、それが元企業であっても。」

『まあそついうこつたい、その施設には逆足MTしかおらんが油断はするなよ。』

「情報の信憑性は？」

『そこらへんは大丈夫だ、こつちからも調べたが逆足だけなのは確かなようだ。』

「わかりました、それじゃあ行きますね。」

『扉を開けるぞ。』

目の前の扉が開いていき、そこからエレベーターの外にでる。

リーダーに敵はおらず、そのまま真っ直ぐ通路を進む。

「っ！」

狭い通路の中で大きく右にブーストを切る。

通路にあった車にレーザーが当たり爆発する。

「敵・・・」

クレスト製逆足MTが一機だけでこちらに向かってくる。

またレーザーが放たれるが左にブーストしよけ、バズーカを三連射する。

相手は避けようとするが全弾あたり爆散する。

レーダーにはこの先の部屋に四機ほど待ち構えているのが見える。

一機はMT、もう三機は熱量の大きさから見て無人機だろう。

一気に突っ込んでいき、部屋の扉の前まで来る。

「ゲンジイ、開けられますか？」

『ああ、いくぞ、3・・・2・・・1・・・開くぞ！』

扉が開くと同時に部屋の右側にいた無人機を一体潰す。

「?!」

だが左側にいたMTからいきなり巨大なミサイルが発射される。

「ゲンジイ！扉を閉めてください！」

「わ、わかった！」

直ぐ様バツクに逆走し、通路に飛び込む。

扉が閉まったあと、大爆発がおきる。

「な、なんですかあれ……」

「MTに大型ミサイルだと?!あんなの見たことがないぞ！」

「すこしだけ見えましたが肩に背負っている二つのコンテナから撃ち込んでくる見たいですね……」

「ということは、あと一発のこってるってことか!?あんなものをくらったら一瞬でスクラップだぞ！」

「あんなタイプはみたことありません、恐らく試験兵器でしょうね。」

「はぁ……まったく、兵器を作ることだけは得意だな連中は。」

「もう一度扉を開けてください、一気に通り抜けます。」

『おいおい……無茶いうなシユカ坊、開けた瞬間ミサイルが飛んでくるぞ。』

「じゃあ扉の中から攻撃します、あぶなくなったら閉めてください。」

『それしかないの……よし、わかった。』

扉が再び開くと同時に二発のバズーカを撃ち込む。

レーダーに写っていた通りの場所におり直撃する。

ミサイルを撃つ間もなく爆散する。

「ふう……つと。」

二機の無人機からマシンガンが乱射されるがそれを避け、一発ずつ撃ち込み撃破する。

そして再び通路を進む。

「開いてる……?」

リーダーをみると三機ほどMTが待ち構えている。

ブーストをフルに一気に突撃して部屋に入る、ミサイルが六発撃たれるが二発の被弾で抑える。

オストリツチに二発づつ撃ち込み撃破する。

『シユカ坊、いくら頑丈だからといってそんな使い方をするんじゃない！修理するのはこっちなんだからな！』

「すみません、でも出し惜しみしてると死んじゃうんで。」

『まあな……その先、外に出るぞ。』

扉を開け、外にでる、月明かりが当たりを照らし出す。

「敵は……！？」

『くるぞシユカ坊！』

熱を切って隠れていたのかレーダーにいきなり敵機が写る。

かなりの数だ、九機もいる。

『おいおい……四脚の強襲型と二脚の87Bが二機、スナイパーMTまでいるぞ!』

「しかもSTARLINGが二機いますよ……戦力があきらかにおかしくないですか?」

そんなことを言っている内に壁を乗り越えて一機のOWLが出てくる。

右腕がロケットに変えられているタイプだ。

『下げる。』

搭乗者らしき男の声が聞こえ、他のMTは武器を下ろす。

『さて、どういえばいいかな……』

「貴方達は?」

『ああ、アライアンスの者だ、キサラギ所属のな。』

「っ……………！」

『私達には任務があつてな、ある男を消さなければいけないんだよ、だがその能力は惜しいからできればつれてこいともいわれている。』

『こいつら、まさか……………』

「なるほど、『チエーン』が消去にきましたか、厄介ですね……………」

「

『元特殊部隊所属のあなたには懐かしいでしょう？レイヴン——ミレニア。』

「よく喋りますね……………」

『おや、私はあなたの後輩だった男ですよ？まあ、強化人間のパーツに体が適合せず結局MT乗りにさせられました。』

「なぜ今頃？何故今になって私を殺しに？」

『さあ、「消せ。」とだけ言われていますから、それ意外に理由はいりません。』

「そうですか……………」

『どうします？今なら戻ってこれますよ？』

「……………どうせ実験台だろくそつたれが。」

『しゃべり方が戻りましたね、なら仕方がない、消えてもらいますよ！』

二脚MTがこちらに突っ込んでくる、と同時にムクドリからレーザーが打ち込まれる。

それをよけ、反撃しようとするも四脚からグレネードが飛んでくる。

「くっ・・・！」

さらにバズーカとロケットまで飛んでくる、ひたすら自分は避けるに徹する。

スナイパーの弾があたり動きが止まってしまふ。

ナパーム弾があたり、装甲が燃え上がる。

同時にムクドリのレーザーで吹っ飛ぶ、崖にぶつかり機体が停止する。

『終わりですか、あっけないですね。』

そう最後に聞こえ、自分は意識は途絶えた。

——はずだった。

バガアアアン
バガアアアン

『?!』

「・・・?!」

爆発音、と同時に青白い光がOWLを打ち抜く

『なっ』

爆発、周りのMTは何が起こったかわからないようで、混乱している。

リーダーをみると入口のほうからなにか近づいてきている。

入口の扉を飛び越え、同時に分裂ミサイルがスナイパーMTをつぶす。

降り立ったのは白銀のAC、右手にレールガン、左手にブレードを装備している。

「BJ?!」

そのままブレードを振りぬぎ、もう一体のスナイパーMTを切り裂く。

二脚MTが突っ込んでいくが一体はロケットで潰され、爆発。

もう一機はバズーカを撃ちまわるが、ブレードで斬られる。

四脚がグレネードを打ち込もうとする、その後ろから自分は三連射のバズーカを叩き込む

「はっ、こつちだよ。」

もう一方の四脚はこちらに銃を向けるもうしろからレールガンを打ち込まれ撃沈、そのまま爆発した。

イヤホンから声が聞こえる。

『生きてるか？まあ生きてるんだろうが。』

「あたりまえですよ、そんな簡単に死にはしません。」

『だろっうな、てかしゃべり方かえたか？』

「ええ、……そういえばムクドリは？」

『ミサイルとレールガンで撃ちぬいてやったさ、べつにいいだろ？』

「にしてもひさしぶりですね、B」。

『あんたもな。』

『シュカ坊！』

急にゲンジイが大声を出してくる、耳が……

「落ち着いてくださいよ、どうしたんですか？」

『どうしたもこうしたもないわ！死にかけるところだったんだぞ！すぐにB」を呼んだからよかったものの！』

「……今回のことについてはすいません、昔の因縁というかなんというか。」

『爺さん、シュカルにも事情ってやつがあるんだ、とりあえずかえってからでいいだろ。』

『……それもそうだな、シュカ坊、機体は動くか？』

「なんとか……しかし迎えに来てもらうしかありませんね。」

『俺もよらせてもらっぜ、今回のことでちょっと用事があるからな』

「・・・なにかあったのですか？」

『なーに難しいことじゃない、お前への提案だよ。』

レイヴンに戻るかどうかのな――――

設定集

シュカル・セライド

男

(22)

黒髪黒眼

背が少し小さい

元キサラギ特殊部隊『チエーン』に専属ACとして所属、大破壊のあとフィルダーシティにやってきてMTのりになる。

幼い頃は孤児で、キサラギに引き取られ実験台にさせられる。キサラギに強化人間の手術を施されており、『ドミナント計画』の実験体だった。

本人は礼儀正しく紳士、だが素がでると怒りやすい。

B J

男

(26)

金髪青目

マツチヨ

酒をこよなく愛するACのり、大破壊後にシュカルとあいそれいら

いの付き合い

ゲンジイ

男

(60)

お爺ちゃん。

フィルダーシテイでAC整備をしていた整備隊長、腕は一流で、弟子たちを手足のよう動かして修理する。

本来なら自分がやりたいそうだが寄る年波には勝てなかったようだ。

設定集（後書き）

次から過去回になります。

誰か感想くれない？

あ、無理だよね、そうだよね、こんな駄文・・・orz

過去回々キサラギ特殊部隊チエーン（前書き）

まだまだいけるぜメルツエエエエエエエエエエ！

過去回くキサラギ特殊部隊チエーン

「それで、話してくれますか？」

あのあとフィルダーシティに戻り、自分の部屋にBJとゲンジイを招く。

BJは金色の短髪に青目、体は鍛え抜かれており、がっしりしている。

「ああ、だがまずあんたが話すことがあるだろ？」

「……ワシがいるとじゃまかいの？」

「いえ、いてください、ゲンジイなら信用できます。」

「そうかい、そういつてももらえりゃあ整備員冥利に尽きるってやつだ！」

「ははっ、爺さん元気だなあ、うちの親方も大概だが。」

「……本題にはいつてもいいでしょうか？」

「……ああ、はなしてくれ、俺も中途半端にしか知らんからな。」

「この話は大破壊の起こるずいぶん前、自分がキサラギ専属AC

乗りで特殊部隊、チェーンに所属していたときの話です。」

雨が降る、ひたすらなまでに、戦場に流れた血を洗い落とすように。

一機の黒いACがそこにたたずんでいた。

『シュカルさん。』

「……なんだ？」

柄にもなくたそがれていた自分に入る通信。

『時間です。』

「りょーかい……」

山岳地帯を何機ものMTが通過していく。

肩にはクレストのマークを付け、その多さは30機以上に及ぶ。

CR―87Mが何機も列をなして進む、中心にあるのは一つの装甲車、周りには索敵用のレーダー車両が四車。

物々しく、かつ隠れるようにその一団は進んでいく。

『敵影なし、もうすぐ本社に到着します。』

『了解。』

少しだけだがMTのあいだにあって緊張が緩む。

『——っ！敵反応！真上ですっ！』

「さすがにこの距離だとばれるか。」

一気に7発ミサイルを叩き込み、輸送車を撃破する。

『しまった！』

『敵はどこだ？！』

エクステンションのステルスが解け、漆黒の迷彩柄のACが姿を表す、肩には四角いマークに何本もの赤線、その線が真ん中の白い箱に繋がっている。その線が真ん中の白い箱に繋がっている。

『ACだと？！情報が漏れたのか？！うて！うて！』

「ゲパルド！援護しろ！」

『人使いが荒いですよ……』

その瞬間MTにミサイルが降り注ぐ、爆炎の中目の前のMTを切る。

コックピットを切り裂き、マシンガンを叩き込む。

連動のスイッチをいれ、飛び上がる。

『撃て、撃て！』

バズーカ弾が大量に飛んでくる、それを避け、大量のミサイルを再び撃ち、何機ものMTを潰していく。

「撃てとしか言えねえのか？無能すぎるぞ。」

『こんなことになったら誰でも混乱するでしょ……』

もう一機のACが谷の上からマシンガンを撃ち鳴らしながら落ちてくる、そのまま一気にMTを切り裂く。

『く……！撤退だ！撤』

「うるせえよ。」

MTを背後からマシンガンで蜂の巣にする。

ゲパルトもマシンガンを連射しながらMTを切り裂き撃破していく。後ろからバズーカが飛んでくる、それを避け、ミサイルを撃ち込み鉄屑にする。

三機のMTが逃げようとする、その後ろからミサイルを大量に撃ち込む。

だが一機だけ逃してしまう。

『ちゃんと撃破してくださいよ……』

「構わねえだろ、ブツは？」

『ありましたよ、奴等が作っていた旧時代の武器のデータ。』

「ならさっさと引き上げるぞ、クレストの奴等が来る。」

『シユカルさんが一機逃がすからですよ。』

「上から一応襲われたという証拠だけは残しとけと言われてるしな。」

『はあ、ならいいですけどね。』

「撤退。」

二機のACはブーストを吹かし、雨の中に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2410w/>

一人の鴉

2012年1月1日07時50分発行